



私は黒瀬サキ。
○学一年生です。

私は普通の○学生の女の子とは
少し違う日常を送っています。

ピュッ

ヒキッ

フキッ



「おつ来た来た。」

サキちゃんおはよう。」

「おはようございます。」

この人は毎朝通学中の私を
待ち伏せしているおじいさんです。

パッ!

ヒキッ

グハッ



「今日も相変わらず発育が良すぎる

エッチな身体しているねえ♥

土日のおっぱい大きくなつたんじゃない?」

「えっと……分かりません……。」

私は周りの子より少し発育が良いらしいです。

んぎゅん

んぎゅん



「絶対おつきくなってるよー！
ほら、ごっちに来なさいー！」

「あ……はい……。」

これは今日も遅刻ですね……。
先生、ごめんなさい。

ピリッ

グキッ

グキッ



「どうぞ。」

おじいさん家の塀の裏で
いつも通り制服を捲り上げます。

「おおっ ♡

またいやらしい下着つけて・・・♡」

・・・おじいさんが何度もエッチな下着を私に
贈るから、仕方なく着ているのですが・・・。



「はあっ♥はあッ♥
やっぱり先週よりおっぱいが重くなっている
気がするよ・・・!
こりゃあスゴイッ・・・♥」

おじいさんは乾燥した
カサカサな手で
私のおっぱいを重たそうに
下から持ち上げて
ユサユサしてきました。



「あッ・・・♡」

「サキちゃんのキレイなお乳首・・・♡
たまらんッッ♡」

「ほろッ
しゃがみなさいッ！」

「・・・はい・・・♡」

おまんこ♡

おまんこ♡



「んっ・・・♡」

私がしゃがんだ瞬間
おじいさんはすぐに
おちんちんをおっぱいに
挟み込んできました。



「はぁあッ♥

先週よりさらに谷間が深くなっているよ♥♥
すごいねサキちゃん・・・♥
ちんちんがおっぱいにずっぽりだ♥♥」

「そうですか・・・♥」

おじいさんが嬉しそうに
おちんちんをゆつくりと
私のおっぱいの谷間に
入れたり出したりしています。

「んっ・・・♥」



「エッチな声だしてツ・・・♡
全くサキちゃんの本ツツツ当に
やらしい娘だよツツ♡♡」

三

さつきとは違い少し汗ばんだ手で
おいしいさんは私のおっぱいを驚掴み、
好き放題ピストンしてきました。

4th ♡



お

10 Fl

「サキちゃんのせいでおじさん若い頃より
ちんぽが元気になっちゃったんだからッッ!♥」

「責任もってしっかりおじさんの
ザーメンそのデカパイで
受け止めるんだよッッ♥♥」

「んッ♥はッ
はいッ・・・♥」



「くっ♡♡♡
だすよっ♡♡♡」

「はいっ♡♡♡
いっぱいおじさんのおちんぽ汁
私のおっぱいに出してくださいっ♡♡♡
んっ♡」

「ああッ♡♡♡
おじさんの朝イチ濃厚ザーメンッ♡♡♡
サキちゃんの乳内に全部出すッ♡♡♡」



「だすぞおッッッ」

「ッ・・・♡」

「へっっッッ・・・♡」

おじいさんのおちんちんが
私のおっぱいの中で
ビクビクしています。
おちんぽ汁・・・熱い・・・♡



「ふう……♡
スッキリした……♡」

「じゃあいつも通り
精子は拭かずに
谷間に溜め込んだまま
学校に行くんだよ♡」

「……はい……♡」



「じゃあめろっめろっじゃあ♥
サキちゃん♥」

ゴキ
ゴキ

「いってきます・・・♥」

おじいさんに言われた通り、
おちんぼ汁でおっぱいが
べとべとの状態のまま通学しました。

ゴキ
ゴキ



学校に着きました。

今時点でもう遅刻確定ですが、

まずはおじいさんのおちんぽ汁をキレイにするために
私はシャワーがあるプールの更衣室に行きます。

「黒瀬、今日もなのか？」

水泳部の顧問の先生にシャワーの
使用許可をもらわなくてはなりません。

「はい……。」

今日もシャワーを使わせてください……♡」



「あっ・・・♡」

「うたってお前も遅刻しちゃうから
とか言って断ればいいのによお♡
こんなにマンコぐちゃぐちゃにして・・・♡」

先生が私のおまんこを乱暴にいじります。

「んッ♡あッ・・・♡」



「ほら、シャワー使いたいんだろ？
ちゃんとおねだりしろよ♥」

「んっ……♥」

先生はニヤニヤしながら私のおまんこをいじります。

「せ……せんせえ……♥」



「なんだあ？黒瀬え♥」

「シャワーを使わせてもらう代わりに
スケベでやらしい私のおマンコに
好き放題種付けしてください・・・♥」

恥ずかしい言葉を言いながら
おしりをふりふりします。

「はあ・・・♥はあ・・・♥」

黒瀬え・・・♥

お前って奴はあ・・・♥」



「んあッ・・・♡♡♡」

「おおっ・・・♡」

「ずっぽりハマッたなあ・・・♡」

もじゅん

すけ

ん



「黒瀬のマン」♥

俺のチンポに吸い付いてきやがる♥
この淫乱J○め♥♥

先生が後ろから激しく
私のお尻に腰を打ち付けてきます。



「先生のチンポ目当てに
シャワー借りに来てんだろ？」

「んッ♥そういう訳ではッ・・・♥」

「あゝゝゝッッ♥

腰を打ち付ける度に黒瀬のやわらけえ
デカ尻がつぶれてエッロツッッ♥♥」

「あッッ♥♥」







勢いよく流れ込んできます。



「ふーッッ♥ふーッッッ♥♥」

先生はしばらく腰をぐりぐりと
私のお尻に押し付け、
おまんこにおちんぽ汁を出し切っています。

「んんッ・・・♥」



「よし、こぼれた精子をきちんと
掃除したらシャワーを使っていぞ。」

「はい・・・♡
ありがとうございます・・・♡」

この時点でもう十時です。
急がないと・・・。

おはよう

ドキ♡ドキ♡



これはちよつと予想外です・・・
困りました。

「はあッ・・・はあッ・・・!!
だ、ダメじゃないか・・・♥
ひ、ひとりでこんな所にいたら・・・♥」

「え、えつと・・・。」

「お、おじさんに乱暴されたく
なかったら・・・♥
わ、分かるよね・・・♥
はあッ・・・♥はあッ・・・♥」



「んっっっ♡」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「すっっ・スゴイっっっ♡
この学校に超爆乳J○がいるって
聞いたことあるけど、この子だよなっっ。
噂は本当だったんだっっ♡」

この人っっ・先生ではないでしょうし
変質者ってやつですねっっ。
ううっっ・さらに登校が遅れてしまいますっっ。



「すごいよこのおっぱい・・・♡
ずっと揉みしだいていたいなあ・・・♡」

「それは困ります・・・。」

「へへ・・・♡」

「あ、あの・・・」

私、急いでいるので
早く中出ししていただけますか？」

「えっ？」



「あ、おっぱいに中出しするのが
お好みでしたら、パイズリでも……」

「君……。こ、こんな状況なのに
やけに慣れてそうだけど……。
経験人数は……?」

「経験人数ってエッチをした人の人数ですよ?
数えてないので分かりませんね……。
少なくともこの学校の男性の先生とは全員で、
それ以外にご近所さん、親戚の方々……」

「ッ……。
も、もういいからッ……!」



「ん♡♡♡」

「こんの淫乱クソビッチがッッ・・・!!」

やっやっやっ!!

「ん
ッ
ッ
♡
♡」

変質者さんがとても乱暴に
おちんぽをおまんこに突っ込んできました。

「うっ・・・♡
こ、これがナマまんこ・・・っ♡

ジョウのせう・・・ッ♥♥

「うああッッ・・・♡♡♡」



「クソツツ……!!
これで終われるか……!!」

「ああッ♥♥♥」

「俺が素人童貞だからって
舐めやがって……!!」

「私ッ♥

そんなつもりはッ♥♥♥」

「うるせええッツ♥♥」



「分らせてやるッッ♥♥
俺のチンポに屈服しろクソビッチッッ♥♥♥」

「やッ♥♥
んんッッ・・・♥」

「くああッッ♥
すっげこのマン」ッッ♥
締まって・・・♥うああッッ♥♥♥」





「んっ♥あぁっ・・・♥」

「でゅっ♥♥♥」

「あぁっ・・・!!」

「んっ」

「んっ」

「んっ」

「はあ・・・♡はあ・・・♡
た、たくさん出してやったぜ・・・♡」

「はいっ・・・♡
お疲れ様でした・・・♡」

「・・・」

「えっと、まだ足りないでしょうか・・・
私時間が・・・」

「い・・・いやもういいよ・・・」

「俺もバレル前に学校出なきゃだし・・・」

よかった。

これでやっと登校できますね。

ドクドク

ドクドク

登校したらずは生徒指導室に行きます。

「黒瀬・・・お前今何時だと思ってるんだ」

「十二時です・・・。」

ドキドキ

いつも通り生徒指導の先生の上に
跨りながら、遅刻のお叱りを受けます。



「……ま、遅刻の理由は
大方分かつてはいるが、
見過ごす訳にはいかん。」

「はい、ごめんなさい……。」

「全く……。」

ほら、いつもより遅かったから
先生のちんぽがもう限界だ。
早くお前の誠意を見せろ。」

「……はい……♡」

ちんぽ

ドクン

「失礼しま・・・す・・・
んんッ・・・♡」

生徒指導の先生のガチガチおちんぽを
ゆっくり私のおまんこで包み込みます。

「おっふッッ・・・♡」

先生のおちんぽが嬉しそうに
ビクビクしているのが
おまんこから伝わります。

んんッ♡

ずんずん

くちゅくちゅ♡

「黒瀬エツ♡

お前自分が毎回遅刻する
理由を言ってみろお♡」

「はいッ・・・♡私が♡
遅刻しちゃうのは♡
このスケベな身体で♡
たくさんのおちんぽを朝から
誘惑してしまうからですッ・・・♡」

ふはん

ふはん

ふはん

ふはん

ふはん



「はー♥はー♥」

俺のちんぽも誘惑して
遅刻許してもらいたいんだろお?♥」

「んッッ♥」

反省してますッ・・・♥」

「はー♥はー♥」

じゃあもつといやらうっ
腰振れッッ♥」

「はいッ・・・♥」



「はッ♥あんッ♥」

激しく腰を打ち付けて
先生のおちんぽをおまんこで
いっぱいしこしこします。

「くうッ・・・♥
いいぞおッ・・・♥」

先生のおちんぽが更に
硬く大きくなってきました。

「はあッ・・・♥んッ・・・♥」



「黒瀬ツ・・・♡」

先生そろそろイキそうだツ・・・♡」

「先生ツ・・・♡」

私のドスケベ淫乱おまんこに
先生のおちんぽ汁で
直接ご指導してくださいツ・・・♡」

「うあッ・・・♡」

いいぞツ・・・♡

くあッツ・・・♡」

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ



「イクッッ!」

「あぁッ」

「イクッッ!」

「イクッッ!」

「イクッッ!」



「ふう。。。♡」

今日の生徒指導は終わりだ。
早く教室に行けッ♡」

「はい。。。♡」

ありがとうございました。。。♡」

これでやっと教室に行くことができます。



四時間目

数学の授業に途中から参加・・・とはいかず、
先生に言われて廊下に立っています。

「今は小テスト中なんだ。」

黒瀬が途中から入ってきたら

みんなの集中力が切れるだろ！

全く・・・。」

「ごめんなさい・・・。」



「お前みたいな生徒は数学の勉強なんて必要ないだろ♥

先生のチンプを喜ばせる勉強をしろッ♥」

ぽんぽん

ぐわんぐわん

ぽんぽん

「はい・・・♥

先生のおちんぽを喜ばせるための勉強をさせてください・・・♥」

「・・・仕方ないな♥」



「んっ♡」

「くっ……♡」

「おおっ……♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ♡」

「はあ……♡はあ……♡
みんなは授業を受けているんだから
あまり声をだすなよっ……うっ……♡」

「はい……♡」



「ああッ♥

黒瀬のマンコは
締めりが最高だなッ……♥」

「んんッ……♥」

静かな廊下に先生と
私のエッチな音が響いています。

「ああッ♥

とろとろできもちいッ……♥」



「みんなが真面目に勉強している間
黒瀬お前は先生とスケベなこととして
いけない子だなあ♥♥」

「ごめんなさツ♥いッ♥♥」

「そんないけない子には
罰として先生の精子をたっぷり
仕込んでやるからなツツ♥」

「んツツ♥はい♥♥
たくさん仕込んでください♥♥」



「ああッッ♥♥♥

もう我慢できんッッ♥♥♥

黒瀬ッ♥イクゾッッ♥♥♥」

「んッッ♥

先生のおちんぽザーメン

私のおまんこに

たっぷり仕込んでくださいッッ♥♥♥

「ああッッッ♥♥♥」





「あッ♡♡」

「ふんふん♡♡♡」

ふんふん

ふんふん

ふんふん

「ふうッ……♡はぁ……♡」

「ん……♡」

ドキドキ

ドロドロ……

先生はその後おちんぽを私にお掃除させました。
私は何事もなかったかのように先生のおちんぽ汁を
おまんこに含ませたまま、先生と一緒に教室に戻りました。



お昼休みは大抵校長室の机の下で過ごします。

「んっ♡じゅるっ♡♡♡♡♡」

「おおッ♡」

「イイぞおッ♡♡♡♡♡」

校長先生はおっぱいでおちんぽをしごかれながら亀頭を舐めまわされるのが大好きなようです。



コンコンッ。

「失礼します。校長」

「お、教頭先生。すまないねえ昼休み中に」

「いえいえ、」

早速ですが〇〇の件について・・・」

校長先生は昼休み中私がおちんぼを
ご奉仕してる間に必ず誰かを呼び出します。
今日は教頭先生（女性）ですね。
バレないようにしないと・・・。



校長先生が私の頭をおちんぽに押し付けます。

「んッ♡」

これはもつとじぐいて舐めろという合図です。

「はッ♡んッ♡」

れろっ♡♡じゅるっ♡♡じゅるる♡♡

「おッ♡ふう。。。♡」

「ん？どうかされましたか校長」

「いやっ♡なんでもないッ♡
続けてくれっ♡♡」



「○○で○○が」

「ふむ・・・♥ふっ・・・♥」

「んっ♥じゅるるっ♥♥」

校長先生のおちんぼがびくびくしてきました。

「以上です。」

あと○年の黒瀬サキについて
複数の女性教師、女子生徒から
クレームが来ています。」

「っ・・・♥」



「おッ♥おおっ・・・♥」

「あの生徒は問題があります。
男性教師の方々はあの生徒に甘い気がしますし・・・。
校長、どう思われますか。」

「そうだなッ♥」

「私から直接指導しようッ♥♥」

「おおッ校長自ラですか!」

校長先生の手がぐいぐいとおちんぽを
私の口に押し付けます。



「んっっ♡じゅるるるっ♡♡」

ビクビクと射精したがっているおちんぽを
激しくおっぱいでしごきながら
亀頭を舐め回します。

「おおっっ♡任せなさいっ♡♡♡」

「んんっっ♡♡じゅるっ♡」



「おっ♥おふっ・・・♥」

「んぷっ・・・♥」

おっぱいの中でおちんぼが波打ち
私のお口にたくさんのおちんぼ汁が
勢いよく注がれます。

「じゅわんわんしんしん♥♥」

「校長・・・？」



「ん・あ・もういいかい？」
「教頭先生」

「あっはい。失礼しました。」

「……一滴残らず絞りつくすんだぞ♥」

「んっ♡はいッ♡♡」

「♡♡♡」
じゅんじゅん

「おおっ・・・くうっ・・・」



「んっ♡ごくんっ♡♡」

「。。。よし、飲んだな♡」

「じゃあまた明日にでも頼むぞ♡」

「はい。。。♡」

校長先生のおちんぽ汁は
しばらく喉に絡みつくのでちょっと困ります。
にしても私、問題児ですね。。。。
うう。。。。



午後の授業は体操着に着替えて体育です。

「おおッ
良い締めりだぞ黒瀬♥♥」

「はッ♥んッ・・・♥」



「本来であればお前も通常通り
授業に参加すべきだが♥
お前が運動するとデカパイが
ぶるんぶるん揺れて
男子生徒に悪影響があるからな♥」

「あッ♥♥♥ん♥ん♥ッ」

「お前は先生がみつちり個人指導してやる♥」





「ほらっ
先生に縛られて後ろから
突かれるのはどんな気持ちだ？
黒瀬♥」

「んっっ
恥ずかしいっですっ・・・♥」

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

「でもお前まんこは
濡れ濡れびちゃびちゃだぞ
これはどういうことだ!♡♡」

「それはッ。。。♡
私が縛られて興奮してて
先生のおちんぽが
気持ちいいからですッ。。。♡♡」



「お前は本当にドスケベだなあ♥♥
 思いつきり先生のチンポで
 お前のドスケベおまんこ突いてやる♥♥」

ピン
 パン
 ショボ
 ショボ

ピン

はい

「♡♡♡」



ピストンが激しくなると
先生のおちんぽが
私のおまんこの奥で大きくなってきました。

うん

うん



「おおッッ・・・♡

でるッ♡

精子絞りとりれるッ♡

「はッ♡

んんんッ♡

狭くて暗い体育倉庫は
私と先生の体液の臭いで
充満していました。
お掃除しないですね。



放課後です。

放課後は3階奥の人がめつたに來ない
職員トイレで、一時間おっぱいを出して
待機するという決まりがあります。

「く、黒瀬ッ♥

失礼するよッ♥」

「はい、○○先生」

くっ

くっ



「はー♡

黒瀬のおっぱいスゴツツ
たまらんツツ♡♡♡♡

「今日という日をどれだけ
心待ちにしていたかツツ♡♡」



普段授業で関わらない先生を
放課後の職員トイレでご奉仕するのが
私の放課後の決まりなんです。

どういったルールで来る先生が
決まるのかはよく知りませんが……



「黒瀬は今日もいろんな先生に犯されたのか?♥♥」

「は……はこ♥」



「くそー——♥

どんどんヤバいエロい身体に
成長してるもんなお前♥♥

「あっ♥」

「来年はお前のいるクラスの担任になって
犯しまくりてえ〜♥♥♥」



「あーっクソツツ♥♥

だめだツツ♥もう我慢できんツツ♥♥

「んっ♥」

ドキドキ

「黒瀬のおっぱいに思いつきり
中出しするからなツツ♥♥

「はっ♥はいッ・・・♥」

あはっ♥

あはっ♥

あはっ♥

あはっ♥



「イクッッッ」

「んっっっ」



「んっっ」

「んっっ」

「ふう~~~~~♡♡♡」

。。。よし♡

便器精子で汚れてたら
掃除してから帰れよ♡」

「は。。。はい。。。♡」

こうしてあっという間に
学校での一日が終わります。



「今日も帰りが遅くなってしまったし、
公園の方の裏道を通って帰りましょう。」

。。。

「。。。来たぞツツ！」

「おいガキッ！大人しくしろよ！」

「えっ？」

突然目の前が真っ暗になりました。

（。。。今日は変質者さんによく会う日ですね。。。）

「んッ♡」

「うおッッ♡この子フェラうまッッ
しかも想像以上のデカパイ♡」

「まんこの締めりもやべえよ♡♡
ケツもでかくてハメ心地最高だわ♡♡」

「んッッ♡♡」

「うわぁぁぁ」

「いゅほっ」

んんん

10%

10%

うわぁぁぁ

んんん

「町で噂の爆乳」○
生ハメレイプ最高♡♡

「んっ♡んぐっ・・・♡」

「俺今までで一番興奮してつかもw」

「俺もw」

「んっ♡んぐっ」

「いっほっ」

「んっ♡んぐっ」

10%

10%

「んっ♡んぐっ」

「んっ♡んぐっ」



「あゝ♡♡

このガキマン「マジでヤッベ♡♡
俺のデカチンが奥までずっぽり♡」

「マジで?w

早く俺もマンコにハメてえ♡♡」

「焦るなつてw

このガキ全く抵抗しねーでむしろ感じてるしw
金玉空っぽになるまで犯しまくろうぜ♡♡」

「んっ。。。んうっ♡♡」

「ヤバッッw

マジ最高♡♡」

じゅぽっ

んっ
んっ

10%

10%

んっ

んっ

「あ——♡」

てか俺そろそろイキそう♡
興奮しすぎてマジやば♡♡」

「俺も♡♡」

「このガキの子宮の一番奥に精子ぶち込むわ♡♡」

「んんっっっっ!!♡」



10%

おはよう

「んっっっ」

「くっくっくっ」

「んっっっ」

「おっっっっっっっっっっ」

「うあぁっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」

「んっっ」



「。。。あー♡」

俺もう「発マン」にハマるわ♡」

「じゃあ俺次撮影するわーw」

「んううッ♡♡」

結局開放されたのはこの変質者さん二人のおちんぽ汁が出なくなるまででした。といつてもそこまで時間はかからなくてよかったです。早く帰りましょう。

じゅぽっ♡

んんん

10%

10%



帰宅後、両親のいない
私を引き取ってくれたおじさんに
今日一日あったことをお話しします。

「サキちゃん、
今日はどうだった？」

「今日は変質者さんたちに
犯されたりして、
いつもよりたくさんの
おちんぽをご奉仕しました♡」

「そっか・・・♡」





「サキちゃんは日に日に
ドスケベな身体に成長して
いるからね♥
この身体を生かすために、
これからも毎日みんなの
おちんぽをご奉仕するんだよ♥」

「はい、おじさん♥」

「じゃあいつも通り
おねだりしてごらん？」

「はい・・・♥
サキのドスケベおまんこに
おじさんのデカちゃんぽで
ハメハメしてください♥」

おまんこ

おまんこ

おまんこ



「サキッ・・・♡♡」

「ああッ♡♡」

○年もの間、
何度もおじさんのおチンポに
ハメハメしてもらっているので、
私のおまんこはおじさんの
おちんぼ型になっ
ていて
どのおちんぼよりも
一番気持ちよくなっ
てしまいます。

「おまんこ」

「おまんこ」



「あッ♥んんッ♥」

「おじさんのおちんぽ
気持ちいいかい?♥」

「はいッ♥♥
おじさんのおちんぽが
一番ですッ♥♥」

「嬉しいよ、サキちゃん♥」



「あッッ♥

もつとッッ♥♥

もつとサキのおまんこ
突いてください♥♥♥

「サキちゃんは欲しがりだな♥♥」

「ああッッ♥♥

じゅじゅッ♥♥♥



「イクツツ♥
イキますツツ♥
イキそうですツツ♥」

「もうかい?♥
仕方ない子だなあ♥」

「ごめんなさツツ♥
あッ♥
イクツ♥イクラツツ♥」

「くツツ♥
締め付けがツツ♥」

「あッ♥
あッ♥
あッ♥

「あッ♥
あッ♥



「イクッッッ」

「♡♡♡♡♡」

「イクッッッ」

「イクッッッ」

「イクッッッ」

「・・・よしよし♥
サキちゃん、いい子だね♥
明日もがんばろっか・・・♥」

「・・・はい・・・♥」

こうして私の一日は終わります。
また明日も私はたくさんのおちゃんぽを
ご奉仕することになるでしょう。

いっしょ

いっしょ

いっしょ

END



総集編追加CG
～サキちゃんの搾乳ボテ腹H～

「はあッ♥はあッ♥
サキちゃん♥
しっかり搾乳できているかい?♥」

「はいっおじちゃん♥」



「今何ml?」

「えっと・・・600mlぐらいですかね・・・」

グワ
グワ

ビク
ビク

グ
グ

ビク
ビク

ビク
ビク

ビク
ビク

グ
グ

ビク
ビク

ビク
ビク

グ
グ

グ
グ

グ
グ

「ふむ・・・」



ズブッッッッッ♡

「おッッッッ♡♡♡♡」

ズッ

ずんずん♡

んんん

んんん

「これで一気に絞れたかな?♡」



「おじさんのおちんぽはマジ
すごいッ♥ですッ♥♥♥」

「サキちゃんのおっぱいミルク
たくさん絞れそうかい?♥」

ゴッゴッ

ハッハッ

ハッハッ

ぽん

ぽんぽん

ゴッ

「ひゃいッ♥
びゅうびゅう絞れますッ♥」

ゴッゴッ

ゴッ



「あッ♡なッ♡ほッ♡」

「ちんぽに集中しすぎだッッッ♡」

手動搾乳機なんだから

しっかり手を動かしなさいッッッー!!」

ぱん♡ぱん♡ぱん♡ぱん♡ぱん♡

「おッ♡」

ひゅん♡ご♡ご♡ご♡ご♡ご♡

ぱん

おッ

おッ

ひゅん♡

ひゅん♡



バチマンッ♡バチマンッ♡バチマンッ♡バチマンッ♡

「おッ♡おッ♡」

「イワッ♡イっっちゃいますぅ♡」

「んっ」

ぱん

ぱん

ぱん

ぽん

ぽん

どカッ

「乳を絞りながらアクメするのか？♡」

スケベな子だなッ♡♡」

「ぐんないッ♡」

「おッ♡イワッ♡イワッ♡おッ♡」



「ふう・・・♡

今日もたくさん絞れたようだね♡

すごいよサキちゃん♡

明日も頑張ろうか♡」

「はい・・・♡」

